



昨年の耐久高校図書館の活動の一つに、「HONTO」を発行する、というものがありません。これは耐久高校の先生方に読書エッセイを書いていただき、このような図書館だよりとして発行するものです。全員にお願いしたので、毎日のように教室や階段に掲示し、生徒の皆さんはもちろん、外部から来られた方や保護者の方にも目に留めていただきました。その反響は大変大きく、本当に多くの方から「読んでよ」「耐久の先生たちはすごいね!」「さすが高校の先生やね!」と感想を伝えていただきました。昨年発行した「HONTO」は冊子になり、秋の読書旬間に生徒の皆さんの手に渡り、一応の区切りを迎えました。冊子を発行したことで、その活動はいったん幕を閉じました。少なくとも、司書の私はそう考えておりました。しかし、最後の50号を出して1年余り、いまだ反響のあるこの企画をここで終わらせるのは惜しい、という声があがり、とうとう51号を発行することになりました。

記念すべき再開第1号は国語科の谷先生です。国語科の先生方は読書好きな方が多く、紹介していただく本も面白そうなものから自分を見つめる本、様々でとても楽しみにしています。谷先生は読書の魅力を三つあげています。その魅力の一つは、同じ本でも読む時が違えば全く違う印象を持つということだといわれました。よく本の帯にこの本には十代の時に読んでおけばよかったとか、もっと早く出合っていたら、とか書かれた宣伝文句がありますが、本当に十代の時にその本を手にとっていても、大人になった時の感想を同じようにもつことはありえません。もっと早く読んでおけばよかった、と思うのは大人の自分で、それまでの経験や成長によってその本の内容を受け入れることができる器ができたから、本の言葉が素直に心に響いてくるのです。だから、若いうちは様々な内容の本に触れて、この本は手に取ったことがある、なんとなく知っている、という経験を増やすのが大事です。新しい物事を吸収する体力のあるうちに、経験値を高めてください。大人になって知らない事柄に直面した時、はなから関係ないと決めつけることなく自分の持っている知識から関連付けて対応する力が、これからの世界を生きる皆さんに必要な力です。

三つの魅力

国語科 谷麻衣子

私は、読書には三つの魅力があると思っています。

一つ目は、自分の知らない世界を知ることができるということ。例えば小説であれば、現実では起こり得ない事件が起こったり、タイムワープができたり。エッセイであれば、「そんな考え方があったのか」と驚いたり、その人の人生を追体験できたり。その本に出会わなければ考えもしなかった世界が、本を読むだけで一気に広がります。

本に出合うタイミング『世界から猫が消えたなら』谷麻衣子

二つ目は、自分の知らない言葉に出会えるということ。難しい言葉を覚えられるという意味ではありません。自分が感じていたもの、思っていたことなどのぼんやりとしたものが、筆者の編み出す言葉によって明確なものになるその感覚が、他にない感覚なのです。「この気持ちを言葉で表現すると、こうなるのか。」そういう発見が、自分の気持ちや考えを整理するときにと役立つものです。

三つ目は、読む年齢やタイミング、読んだときの気持ちや状況によって、見えてくる世界や響く言葉は違うということ。だから同じ本を何度も読んでも、そのたびに感想や印象的な表現が変わるのです。例えば、昔読んだ絵本なんかでも、今読めば当時とは見え方が全然違うはずで。

さて、印象に残っている本として私が紹介するのは、川村元気さんの『世界から猫が消えたなら』という小説です。映画化されたので知っている人も多いのではないのでしょうか。



この小説の主人公である「僕」は、医師から突然余命がわずかであることを宣告されます。家に帰るとそこで待っていたのは、自分とそっくりの見た目をした悪魔でした。その悪魔が『僕』の命を一日延ばすのと引き換えに、この世界から何か一つ消す」という取引をもちかけてきます。そうして「僕」はその取引に乗り、自分の命と引き換えに、世界からモノを消していきます。「僕」が消したものは電話、映画、時計、猫、そして、僕自身。

私自身「僕」の選択に驚きながら読み進めましたし、自分が「僕」なら何を消すのかと想像を膨らませることで、普段なら考えないような、周りにあるモノの価値や役割を考えるきっかけとなりました。私が高校生だったとき、周りを見渡すことなんて全くできていませんでしたから、あのときにこの小説に出会えていればと、高校時代の自分を振り返ってしみじみと思います。

また、何らかの教訓を含んだようなこの小説には、印象的な言葉がたくさんあります。私が一番はっとした言葉は、「プレゼントは物『そのもの』に意味があるのではなく、選んでいるとき、相手が喜ぶ顔を想像する『その時間』に意味がある」という言葉です。自分が贈り物をする際になんとなく抱いていた思いが、見事に言葉で表現されていました。これまでは「なんとなく」だったのですが、言葉での表現を知ったことで、自分の気持ちや大切にしたいものがはっきりしました。

読書は勉強にはなりませんが、「勉強だ!」と身構えなくてもいいと思います。気楽に読んでも、それなりに発見があって楽しいものです。魅力の三つ目として挙げたように、本は読むタイミングや状況によって感じ方が変わるものです。みなさんが今しか感じられないものが必ずあります。ぜひ今のうちに色々な本を読んでみてください。